

ジャーナリスト 伊藤準也氏 写真家 医療ジャーナリスト

表出した治療技術の問題 医療の質を担保する仕組みが必要

私が興味をもったのは、患者が「二度とかかりたくない」と感じた理由として「医師の治療技術に不安を感じる」を2番目に多く挙げたことだ。過去にさまざまな団体が同種のアンケートを行ったが、治療技術に関する評価が明確に示されたことは注目に値する。

医師と患者間に発生した過去のトラブルを検証すると、理由として誤診を含め「病気が治らない」という事実が数多くあった。患者はこれまで我慢してきた。ここへきて、技術の問題がようやく表出してきたということだろう。

問題の根幹にあるのは、診療所の医療の質を担保する仕組みがないことだ。日本では多くの専門

家がいきなり「かかりつけ医」として開業しており、これは先進国のなかでは異質。専門家がジェネラリストになる過程で、研修が医師本人に委ねられ

ているのが実情だ。

医療現場の意識改革が進むなかで、「なぜ、こうした医師がいたにしているのか」との意見もあるが、私は逆に捉えている。過酷な病院勤務医の業務から「逃避」する形で開業する医師が、近年ますます増えてきた。かつての「志」を失った医師が増加傾向で、なかにはジェネラリストとしての能力が欠落している人もいるのではないか。

多くの患者が指摘した「医師の態度」は重要だが、あくまで「医療サービスの要素の一つに過ぎない。最も重要なのは正確な診断と治療。そしてジェネラリストとして大切なのは、自分の手に負えない患者を識別して病院等に紹介する確かな目だ。



いとう・しゅんや

●国内外を問わずさまざまな医療現場を精力的に取材し、患者中心の医療実現のために活動中。フジテレビ「とくダネ!」のほか、多数のメディアでより良い医療のあり方を追求・発信し続けている。日本医療ジャーナリスト協会会員、日本医療機能評価機構広報委員会委員、東京都医療安全推進事業評価委員会委員